
My Sweet Beast

天音由羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

My Sweet Beast

【Nコード】

N7174Z

【作者名】

天音由羽

【あらすじ】

新解釈 「美女と野獣」です。

実父と継母、そして二人の義姉妹と暮らしていたリリー。

ある日街へ仕事に行った父の帰りが遅いことを心配し、街を出ようとする。

その時、一通の手紙が。

「父親の命は預かっている。無事に返して欲しければ娘を寄越せ」

リリーは父を助けるため、単身野獣の城に乗り込むのだが…。

紳士で上品な心優しい野獣と、明るく気立てのいいリリーの恋物語。
ほのぼのハッピーエンド予定です。

Vol. 1 出逢い

MY SWEET BEAST

鬱蒼と生い茂る森の中。

一筋の光も差し込まず、足元は常にじめじめとした湿気でぬかるんでいる。

頭上には青黒い葉が覆いかぶさってきて、木々の蔭が蜘蛛の巣のように絡み合っている。

フクロウの低い鳴き声が絶えず響き渡り、時折野生の狼と思われる唸り声が微かに聞こえる。

葉擦れの音はなにやら幽霊の囁き声のように聞こえて、ゾクリと身震いしてしまう。

どうして私が。

なんてことは分かっている。

何より大切な父は、私の母を亡くしてからしばらくして、どこで見つけてきたのかド派手な極楽鳥みたいな継母と再婚した。

継母にはこれまた似たような装飾に身を包んだ、九官鳥（つまりおしゃべりで頭が軽いつてこと。っていうと九官鳥に失礼ね）みたいな二人の娘がいて。

私には一度に面倒臭い家族が増えた。

その三人は大きな街まで仕事の交渉に出向いた父にたんまりお土産をねだり、家では私を召使替わりに顎でこき使い、好き勝手に過ごしていた。

あれだけねだられば値段も相当なはずだ。

父は私にも土産に何が欲しいか聞いてくれたけど、お土産なんていらなかった。

「お父さんが無事に帰ってきてくれればいいわ」

そう言つてこれ以上継母たちが父に何かをねだる前に、さっさと出かけるよう促した。

その父が帰宅予定より一週間を過ぎても戻らない。

何の連絡もないまま帰つてこないなんておかしい。

どうしてこんなに帰りが遅いのか、手がかりを求めて街から帰り付いた人たちに手当たりしだい聞いて回ったけれど、結局何も分かっていなかった。

こうなつたらしょうがない。

生まれた頃から一緒に暮らしている愛馬にまたがって、自ら父を探しに行こうと街を出ようとしたのだけれど。

出かけようとしていた私を見つけて、慌てた郵便屋さんが呼び止めてくれた。

そして一通の差出人のない手紙を受け取る。

開いてみれば、そこに書かれていたのは

「父親の命は預かっている。無事に返して欲しければ娘を寄越せ」

いかにも悪党な文章でそんなことが書かれていた。

継母たちの反応は推して知るべし。

「お母様！！とつても怖いわぁ！」

「どうしちゃったのかしらお父様！！何をやらかしたの!？」

「まったく困つたものねえ。大丈夫よ、私の可愛い娘たち。リリー、あなたが行つてらっしゃいな」

「…」

「こつも分かりやすいといつそ清々しい。

無論あなたたちに言われなくても行くつもりでした。

と、喉まででかかった言葉を無理やり飲み込んで、私は結局また愛馬にまたがって街を出ることにした。

最初に手紙を読んだ時には書かれていなかったはずの地図が、森に入った頃突然浮かび上がったのにはビックリだ。

どこへいくにせよ、この森を抜けなければいけないから、とりあえず進もうとした矢先のことだったのだけれど、どうも解せない。

地図によれば森には幾筋か道があるらしいのだ。

素直に従っていくと、確かにあった。

一度も通ったことのない…というか、今まで見たこともない道だったけど。

こんなところに道なんてあったのね。

なんて呑気に思えたのは最初だけだった。

地図通りに一歩踏み出すと、急に愛馬が怯え出してそれ以上先へ進めなくなってしまったのだ。

仕方なし馬を降りて、自宅へ戻るように押し返してやり、私は一人歩き出したというわけ。

動物の本能って素晴らしい。

あの子にはこの森がどんな場所なのか、察することができたんだから。

こんな不気味なところだって分かってたら、私だってもっと準備万端にして旅立ったのに。

後悔してももう遅い。

頼りにできるのは手元にある地図一枚だけ。

それならば、あとはここを一刻も早く抜け出さなければ。

ぬかるむ地面をしつかり踏みしめ、足早に歩く。

いろんな声や音が聞こえるけれどそれら全てを聞こえないふりし

て通り抜けていく。

服が無数の細い枝に引つかかり、どうしても数力所破けてしまっただけけれど、そんなこと気にしてられない。

最後は走る勢いで森を駆け抜けた。

暗くて深い森は、急にぱっと開けた。

顔を上げるとそこには聳えるように建てられた大きな門。

延々続いている白い外壁には様々な模様が複雑に彫刻されている。

おどろおどろしい悪魔が掘られているのは、ここの主の趣味なのだろうか。

なんて趣味の悪い。

思わず顔を顰めてから、おそらくこの向こうに父がいるのだと、覚悟して鉄の扉を押し開けた。

これまた不気味さを煽る鉄同士の擦れるギイという音が辺にこだまする。

「失礼します…」

一応声をかけてみる。

微かに聞こえる小さな足音。

…何人かいるらしい。

でも人の足音とは何かが違う。

そう思っていたら、小さな幾つかの影が目の前に躍り出た。
え。

「お待ち申し上げておりました。さあ、どうぞ」

丁寧に奥を指し示されて、恭しくお辞儀される。

に、人形？

目の前で喋ったのは男の子のビスクドールだ。
傍らには女の子のビスクドール。

なぜ？

私、もしかして夢を見てる？

森の中が怖すぎて気絶したのかしら？

ぎゅっと頬をつねってみれば

「痛い」

ってことはこれは現実なんだわ。

現実なのに、なぜ人形が？

そう問いかけたって、答えはどこにもない。

キツネかタヌキにバカされてるのかしら。

でも。

もしそうなら、化かし合いに勝てばいいだけのこと。

思い直して、私は促された奥の方へ足を踏み出すのだった。

二体のビスクドールは器用に歩いて城内を案内してくれる。
森と同じくらい、いえ、それ以上に暗い廊下は足音がやたらと響く。

両側の壁沿いにブリキでできた鎧が飾られていて、手にされた槍が鋭い鋒を鈍く光らせている。

天井には天使…ではなく蝙蝠羽の悪魔が悪どい顔で飛び回る天井画。

壁に飾られた彫刻も幼い頃読んだ本の挿絵に出てきたゴブリンだ。
なんて悪趣味。

本日二度目の感想に、思わずまた顔を顰めてしまった。

そうして城をぐるりと見回しながら歩いているうちに、どうやら地下の牢屋らしき場所にたどり着いたようだ。

口ウソクがある場所を照らしてくれる。
ぐらりと影がゆれた。

「お父さん？」

「まさか…リリーか!？」

「ちよ、お父さん! どうしてこんなところに…」
しばらくぶりの再会に手と手を取り合って、鉄格子越しに顔を合
わせて喜んだのも束の間。

ぬらりと背後に気配を感じた。

大きな影に覆われて、辺りが一瞬で暗くなる。

異様な気配だった。

振り向くのも躊躇われて、体が硬直する。

「…父親を取り戻しに来たか」

低く地を這うような声。

吐息は獣。

漠然とした恐怖に包まれる。

ぐっと瞳を閉じて、声の主の方へ向き直った。

人形が喋ってここまで案内してくれた。

見たこともない道を通ってきたし、第一あの手紙の文章。

門の彫刻に廊下の天井画、壁の彫刻。

もう何が起こってもおかしくない。

覚悟して、瞼を押し上げる。

「……………」

嘘…でしょう…。

目を限界まで見開いていたと思う。

呼吸の仕方まで忘れていた。

驚愕。

全身を覆っているであろうライオンの様なたてがみに、口からち
らりと見える鋭い牙。

どんなものも切り裂いてしまいそうな爪に、大きな獣の手。

荒野を素早く駆け抜けていそうな逞しい脚。

暗闇でも輝きを放つ力強い碧眼。

視線だけで人を殺せそうだ。

事実、今の私は彼に捕食される寸前だ。

目の前の相手を見た瞬間に、自分の命はすぐに潰えるだろうと思えた。

あの噂は本当だったのだ。

幼い頃から街でまことしやかに語られていた「野獣」の昔話。

人を攫っては喰らい、悪魔のように血に飢えている、と。

どうして父はこんな恐ろしい野獣の住処に入り込んでしまったのか。

考えたところでもう遅い。

私も喰われるのだろう。

そう、全てを悟って諦めようとした時だった。

ぐつと野獣が近づき、いつの間にか床に座り込んでいた私の腕をとって、立ち上がらせる。

え？

それから父を閉じ込めていた牢の扉をすんなり開き

「これで契約は成立だ。お前を解放しよう」

静かな声で告げた。

囚われの身のはずだった父は、乱暴に扱われることもなく、どこからともなく現れた荷車にドサと載せられる。

「リリー!!!」

悲壮な声がして、ハッと我に帰れば父が目の前から遠ざかるところで。

「お父さん!!!」

叫ぶ私の体を大きな獣の手がつかんで引き止めていた。

すぐに父の姿は暗闇に消えて見えなくなる。

助かったの？

これで本当に父は助かったの？

たまらず野獣に縋り付いて、獣の顔を見上げた。

全身の力が抜けて、足で体を支えられない。
でも私の体は床に打ち付けられずに済んでいた。
野獣だ。

遅しい獣の腕が、私の腰を支えてくれている。

…なぜ？

全ての問いは言葉にならずに消えていく。

けれど。

「そなたの父は無事に送り届けられる。安心するがいい」

「え？」

見抜かれた？

それとも、声に出していた？

「部屋はこちらだ。歩けるか？」

「へ、や？」

「ここで寝たくないだろう？」

「…私、父の代わりに…」

牢に閉じ込められるんじゃないの？

あなたに食べられるのを、ここで待つんじゃないの？

どうして部屋なんて？

心の中の問いかけを、彼はどう読み取ったのだろう。

一瞬だけ怪訝な顔をしたかと思ったら

「言っておくが、私はそなたを喰らったりしない」

なんて言った。

続く

どこまで歩いてても、憂鬱さを増す廊下は重く薄暗い。

やたらと響くのは私の足音と、野獣の足が爪で床をひっかく音だけ。

布で覆われているビスクドールの足は、ぼふぼふと小さな音を立てるのみ。

無言の重圧に押しつぶされてしまっかと思っただけれど、意外なことに、野獣は静かに話しかけてくれていた。

「部屋には一通り必要なものをそろえてある。足りないものがあればいつでもヴィスコンティに言うといい」

「ヴィ、ヴィスコンティ？」

「男の人形の方だ。身支度は女の人形の、シシリエンヌが整えてくれるだろう」

野獣は丸くて大きな指で（ほぼ手で）人形を指し、ビスクドールの紹介をしてくれた。

視線を二体、いや、二人？に向けると、揃ってこちらにお辞儀してくれる。

私もお辞儀を返したかったけれど、それは叶わない。

なぜってそれは、野獣が相変わらず私の腰を支えて…というか、抱えているからだ。

どうやらまだ力が抜けていると思われるらしい。

けれど意外なほど心地よい支えだった。

ふさふさの毛並みもさることながら、なんというか、一つ一つの行為がスマートなのだ。

野獣つてもつと荒々しいものだと思っただけ、彼は違うみたい。

第一彼は私を食べないと言った。

しかも。

「ここがそなたの部屋だ」

通されたのは我が家がまるごと入りそうな大きな部屋で、窓際には天蓋付きのふわふわなベッド。

サイズは多分クイーン？

一人で寝るならどれだけ暴れても大丈夫そうだ。

背丈より大きな窓にはひらひらの桃色カーテン。

クローゼットはウォークインで、多分実家の部屋より広い。

用意された服は全て高級な生地で作られた、仕立てのいいドレスばかり。

えっと。

これを普段着に使え、と？

思わず野獣を見ると満足げに頷かれた。

シリエンヌも目を輝かせている。

人形だけどちゃんと表情も変わるし、まるで生きているみたい。

「あの…私、本当にこの部屋を使っているんですか？」

「なぜだ？」

深い碧眼が穏やかに問いかける。

「私は父の代わりでしょう？ 囚われの身なのに、こんなに至れり尽くせりなんて」

信じられない。

言外に告げて部屋を見回した。

けれど野獣は

「そなたにとつてはこの城が檻のようなものだろう。それで十分だ。私はそなたを捕らえたが、傷付けるためでも辱めるためでも、ましてや喰らうためでもない。できる限り快適に過ごせるよう配慮するつもりだ。ここでの生活は保障するし、安心していい」

と、ことのほか穏やかな口調でそう言った。

騙されているのとは違う。

城に閉じ込められるなら、牢は必要ないってこと？

それにしてもこんな立派な部屋を充てがうなんて、一体どうして？

疑問符ばかりが浮かぶ。

それに明るい場所に出てようやく分かったことがある。
ライオンのようなたてがみは夕陽のような黄金色をしていて、きれいに手入れされていた。

身につけているのは、大きな体格に合わせて作られた特大の貴族衣装。

絹糸で織られた光沢のある紺色のジャケットに白いズボン。

ふさふさのしっぽもたてがみと同じ色をして優雅に揺れている。

服から出ている手足は確かに獣のものだけど、爪もすっかり磨かれ、研がれているし、汚れは一切付着していない。

清潔さの代名詞「石鹸の香り」がただよう野獣なんて、誰が想像しただろう。

その野獣がひょいと私の顔を覗き込んできた。

「食事は揃って食堂で食べることになっている。もうすぐ用意ができるはずだ。破けた服を着替えてくるといい。ただし疲れた顔をしている、コルセットのきついドレスよりゆったりとしたものを着た方が良さそうだ」

「…はい」

予想外の心配りまで見せられて、私は素直に頷いた。

小さいといってもシシリエンヌの身長は1メートルくらいある。

人形にしては大きな方かもしれない。

おかげで彼女は軽快な動きでクローゼットから、適当なドレスを見繕って持ってきてくれた。

ついでに椅子に乗りながら着替えを手伝ってくれようとしたのだが、いつも自分で全てやっている私はそれを丁重にお断りした。

シシリエンヌは働き者だ。

一つやることなくなくてもすぐに次の仕事を見つかる。

私が脱いだ破れた服を、あつという間にどこかへ運び、支度の整った私を食堂へ案内するためにすぐ戻ってきてくれた。

「リリー様、こちらへどうぞ」

想像していたよりも落ち着いた声で促される。

やっぱり疑問だ。

人形に声帯なんてあるのかな。

どこから声が出るんだろう。

ビスクドールのはずなのに表情が変わったりするし。

なんて脱線した疑問が頭をぐるぐるするけれど、シシリエンヌが丁寧に手で促してくれたから、従って部屋を出ることにした。

あれ？

廊下に出た途端僅かな違和感を覚える。

その正体はすぐに判明した。

明かりだ。

野獣：さん、に、案内された時は今の半分ほどの明かりだった。

今は鉛色の鎧が勢ぞろいして壁に飾られていても、最初ほどの不気味さはない。

天井の悪魔はやっぱり好きになれないけれど。

よく見れば足元に敷かれた赤い絨毯は、毛玉一つないくらいきれいに掃除されている。

壁も蜘蛛の巣なんてないし、塵一つない。

歩幅の小さなシシリエンヌが滑るように廊下を歩いても埃が立たないのは、毎日細かい所までしっかりと掃除されているからだろう。

内装は悪趣味だけど、キレイ好きってことかしら。

でも、誰が掃除してるの？

シシリエンヌたち？それとも、まさか…。

「どうした？」

「ひっ！？」

野獣さん!？

突然大きなライオンの顔が現れたりするから、反射的に後ずさって悲鳴を上げそうになった。

直後に見えたのは若干耳がしゅんと垂れた野獣さん。

あ。

「あの、ごめんなさい。びっくりしちゃって」

「…いい。誰でもこの顔を見れば驚くだろう」

案の定な誤解をしてる野獣さん。

もちろん顔を見てびっくりしちゃったのは本当なんだけど、獣の顔に驚いたんじゃないの。

「顔に驚いたのではなく、突然現れたから驚いてしまったんです」

きつちり訂正して彼の顔を覗き込む。

くるりとした碧眼は複雑そうな色を見せた。

納得しかねる、って顔ね。

けれど野獣さんは深く追求せず、食堂の椅子を引いて私を座らせてくれた。

少なからず傷ついているのに、責めることも叱ることもなくエスコートするなんて。

とつてもジエントルマン。

普通に考えたら自分を捕らえた人喰い野獣と食事だなんて、泣いて悲鳴を上げながら怯えて震え上がってもおかしくない状況。

でも不思議。

ちつとも怖くないの。

おかげでどのくらいの広さなのか比較対象も見つからないような食堂を見回す余裕まである。

天井から吊るされているのは四方八方に光を反射させる豪華な三段シャンデリア。

壁に描かれているのはやっぱり悪魔なんだけど、彼らが戯れるのは色鮮やかな春の景色で。

窓枠や柱は金で塗られている。

サテンで作られたカーテンはしっとりした光沢を放ち、ロイヤル

ブルーが心を落ち着かせてくれる。

あれって本当にサテン？

もしかしたらもつと高級な生地かもしれない。

食堂の中央に置かれたテーブルはよく磨き上げられて、どこもかしこも輝いている。

アンティーク調の重みある茶色の椅子もテーブルと同じ素材だ。

背もたれを大きく作り、よりかかる場所にはふわふわのクッションまで置かれている。

いつの間にか用意されていたカトラリーは、全て本物の銀食器。

持ち手にはすべて細かな彫刻が施されている。

縁取りに使われているのはこれまた本物の金だ。

これ、やっぱり夢？

現実だなんてとてもじゃないけど信じられない。

けれど

「どうした？」

野獣さんの声はちゃんと耳に届いているし、その感覚もリアルだ。なぜかおでこに手を当てられてるけど、肉球の柔らかさが心地いい。

両肩に手を置かれて少しだけグラグラ揺らされてるけど、なんだかそれも心地いい。

って、やっぱりこれって夢？

「現実だ」

あー、そうか。

現実ね。

って！！

「！？」

慌てて遠ざかっていた意識を覚醒させる。

おでこにはまだ野獣さんのぷくぷく肉球が当たっていて、穏やかな碧い瞳が私の視線を捉えている。

なんだかバツの悪そうな顔をしてる。

まるでイタズラしたのがバレて怒られた小さな男の子みたいな顔。
どうしてあなたがそんな顔してるの？

あんな手紙をよこした悪党なんじゃないの？

…変な人。

「その、すまない」

「？」

「現実逃避したくなるほど辛い思いをさせているのはよく解っているし、申し訳ないと思っている。だが、こうする他なかったのだ。この姿に驚き、恐怖心を抱くのも…当然だ。だが、せめて食事はしつかり摂って欲しい。そうでなければそなたが体を壊してしまう」
苦しそうに歪められた表情は、切実さを前面に出して、懇願しているみたい。

だから、どうしてあなたが私を心配しているの？

父の代わりに私を捉えたのは、他でもないあなたなのに。

でも。

「どうしてもともに食事するのが無理だというなら私が席を外そう。
どうか食事を楽しんでくれ」

辛そうに提案する彼の言葉に頷くことは出来なかった。

続く

Vol.3 初めての晚餐

困った。

何本もあるカトラリーは、一体どれを使えばいいのかわからない。家ではナイフもフォークもスプーンも、いつも一本だけだったもの。

首をかしげながらそつと野獸さんを見る。

マネをすればいいかと思って視線を向けたのだけれど、彼は既に一本ずつを手にとって食べ始めようとしていた。

あら。

タイミングが遅かったらしい。

けれど結果オーライ。

野獸さんが私の視線に気づいてくれた。

「こういう夕食は初めてか？」

「はい。お恥ずかしながら」

「そうか。気にすることはない。外側から使うのだ」

なるほど、外側からね。

高価なナイフとフォークを手にする。

器用に一欠片を口に運ぶと、その美味しさに頬が緩んだ。

「上手だ」

ちよつとぶつきらぼうなほめ方だけれど、何だか嬉しくなる。

「ありがとうございます」

笑顔と一緒にそう言えば、野獸さんは手にしていたフォークを落として慌てた。

どうしたのかしら。

あらあらと思ったけど、すぐに気を取り直した野獸さんは、さつきより少し速いスピードで料理を平らげていた。

一方の私は彼に比べて一口が小さいせいか、倍近い時間をかけて食べ終える。

するとすぐに次の料理が運ばれてきた。

初めて目にする大きさのステーキ。

肉厚でワイン色の肉汁がじわりと浮かんでいる。

立ち上る湯気は香ばしい。

臭みを消すための香草もハーブの優しい香りがする。

一口大のステーキを口に入れるとあつという間に旨みが広がって、噛めば噛むほど美味しさが広がる。

「美味しい」

無意識に言葉にすると、向かい側の野獣さんはほわりと表情を崩した。

「気に入ったか？」

「はい」

素直な返答に彼は満足げに目を細める。

そして彼も一口、洗練された仕草でステーキを口へ運ぶ。

なぜかそれを目で追って、反応を待ってしまふ。

思ったとおり彼も味に満足したのだろう、頬を緩めていた。

良かった。

そうひとりごちて、ハツとする。

良かった…？

どうしてだろう、胸の中が温かい。

変なのは私の方だ。

いくら想像と違っていているからって、相手は野獣さん。

私を食べないとは言ったけど、捕まえたのは間違いなく目の前の人。

人？

既にそんな感覚で彼を見ていたことに気づかされる。

私、彼を人として見ている？

目の前にいる、誰がどう見ても獣の、彼を…？

「どうした？具合でも悪くなったか？」

問いかける口調は穏やかだし、内容は私を気遣うものだし。

確か街の噂で聞いた野獣は、いつでも鋭い牙を剥き出しにして研ぎ澄まされた爪を振り回し、凶暴な手足で捕らえた獲物を引き裂き、血が飛び散るのも構わず、というよりむしろ血肉を喜んで貪り食うって…鬼か悪魔かはたまた魔王か、つてくらい恐ろしい存在だった。とても「人」だなんて形容できない。

そもそもあんな大きな手で器用にカトラリーを扱ったり、新鮮だとわかる野菜がふんだんに使われた前菜を美味しく平らげたり、ぷっくりした肉球で優しくおでこに触れたり、何度も脳内にトリップする私を気遣ったり、本当に野獣ならそんなことするかしら。

私はしげしげと野獣さんを見つめる。
丸くて温かな碧眼は戸惑うようにこちらを見つめ返す。
そうよ。

本当に野獣ならこんな血の通った優しい目をする？
人の体調や精神状態を気遣ったりする？

自分が優位に立っていることは十分に分かっているだろうに、あまつさえ捕らえた人間の食事を優先して自分は席を外すなんて言い出したりする？

答えは全て、ノーだわ。
彼が本当に野獣なら数々の振る舞いをするわけがないもの。
…かといって、着ぐるみにも見えないのよね。

体を支えてもらっていたからよく分かる。
彼の体温は本物だ。

「あの」
「何だ？」

野獣さんは突然口を開いた私に困惑しながら返事をする。
ほらね、こんな反応は高い知能を持った人がすることよ。
本能のままに人を喰らう野獣のそれではないわ。

「あなた、本当に…本当に野獣さんですか？」

目の前の可憐な唇はそう告げた。
は？

私の顔はさぞ情けないものだったろう。

あまりに脈略のない問いかけに一瞬言葉を失う。

なぜかこの娘は時折考えに耽る事があり、無言でくるくる表情を変えるところがある。

最初は私の姿と自分が置かれた状況に悲嘆し、恐れ、怯えているせいかと思ったが、私が席をはずそうと提案したのをきっぱり断つてから、どうやら怖がって現実逃避しているのではないとわかった。食事が運ばれれば嬉しそうに頬を綻ばせて料理を口に行っているし、緊張している様子も見られない。

少しの間和やかな時間が過ぎていたのだが、彼女は再び突然思案顔をした。

そして、なぜかじつとこっちを見ていると思ったら、先の問いかけを口にしたのだ。

何がどうなつてあんな質問が飛び出したのか分からない。

分からないが…ここまで冷静に接してくる人間は初めてだった。

あの父親も肝が据わっていたが、さすがその娘だ。

地下牢では父親を心配する思いもあつてか、突然の出来事に慌てたり怯えたりする様子を見せたが、これまでの短い時間で私を観察していたのかもしれない。

本当に野獣か、などと聞かれたのは初めてだ。

「…見ての通りだが」

内心湧き上がる嬉しさをひた隠したせいで、やたら威圧感のある答え方になってしまう。

けれど娘は少しも変わることもなくこちらを見つめている。

そして突然立ち上がると、私の背後に回った。

手には何も持っていない。

とはいえ何をされるか分からず警戒した。のだが。
ふわり

小さな手が首筋に触れる。

それからペタペタと、たてがみを撫でるかのように手を動かし

「やっぱり」

小さく呟いた。

「やっぱり、とは？」

問えば彼女は再び自席に戻り、複雑な笑みを浮かべる。

「もしかしたら着ぐるみかも、って思ったけどやっぱり違った。その姿は本物ね」

ああ、その「やっぱり」だったのか。

納得したが、直後、彼女は丸い栗色の瞳をまっすぐこちらに向けていた。

まだ疑問があるのだろうか。

視線で次の言葉を促すと、彼女は小さく微笑む。

それは私の心臓をどくと動かすには十分すぎる魅力を放っていた。

なんとか動揺を押し隠すが、この体格では鼓動まで伝わってしまいそうだ。

しかし

「あなたの名前を教えてください」

慌てる私の様子などおかまいなしに彼女はそう言った。

名前？

「お互い呼び合う名前は必要でしょう？いつまでもあなたを野獣さんって呼ぶのは失礼なもの」

「ではそなたの名前も教えてくださいるか？」

「もちろん。あ、そうよね、名前を聞くならこちらから名乗るのが礼儀ね」

いや、こんな私に名前を教えてくださいるか、という意味で問い返

したのだが、彼女は別の解釈をして納得していた。
そしてさつと華奢な手を差し出す。

これは？

戸惑っている、彼女はその手で私の手を優しく握る。

握手の意味だったのかと、鈍った頭はのろのろと反応する。

彼女の行動を先読みしてリードしなければ、と思う心と反対に体は鈍りきっていた。

華々しい社交界で姫君たちを相手に、夜毎ダンスをしていたのはもう数百年も昔のことだ。

心は覚えていても、脳はそれらを少しずつ忘れてしまったのかも
しれない。

なんとも言えない虚無感と苛立ちが心に巣食う。

けれどそれは一瞬で吹き飛んだ。

「私はリリー。あなたのお名前は？」

「…ラピス…ラピス・ランフォードだ」

「そう。ラピスさんっておっしゃるのね。どうぞよろしく」

「あ、ああ」

彼女の笑顔は、穏やかに輝く月のようだった。

続く

住んでいた町の中央には噴水広場がある。

収穫祭に聖夜祭、季節ごとのお祭りが開かれる町一番の広場。

祭りの日には近隣の町や村からも人が集まり、広場は人の波に埋め尽くされる。

多分数百人以上の人が訪れるだろう。

そのくらい、広いと思うの。

でもね、ここは室内よ？

なのにどうしてこんなに広いのよーっ！！

と、心の中で叫んだ私は、どこぞの池か湖かと思うようなただっ広いお風呂を独り占めして、とつても贅沢な入浴タイムを過ごした。湯上りに用意されていたのはシルクの夜着と、何か動物の毛で作られたふかふかのガウン。

おかげで湯冷めすることなく部屋にたどり着けた。

部屋はシシリエンヌがすっかり整えてくれていて、ベッドの横にあるサイドテーブルの上には、心地よい眠りを誘うほんのり甘いホットミルクまで用意されていた。

室内の明かりはほとんどを消されているけれど、大きな窓から覗くまんまるの月が照らしてくれているおかげで、ちょうど良い明るさだ。

ぬくぬくしたベッドに潜り込んでも月が見える。

空には星が敷き詰められたかのように瞬いていて、静寂が広がるふう、とついたため息が何だかひどく響く気がした。

お父さんはどうしているかしら。

無事に家までたどり着けたかしら。

あの人たちの我俣に振り回されていなければいいけど。

…なんて心配しても、もう届かない。

せめて私は無事だと伝えたい。

野獣さん、ううん、ラピスさんは私を食べるつもりはないって。檻も必要ないし、このお城での生活も保証された。

今まで見たこともないような豪華な部屋とドレスに食事まで与えられて、薔薇が浮かんだお風呂まで入ったわ。

ベッドは天蓋付きのお姫様仕様だし、お世話をしてくれるメイドさんもいるのよ。

人形だけど。

初めて彼を見たときは絶望したけど、もうそんな気持ちもすっかり消えた。

ここまで大切に扱われたら、嫌な気分なんてしない。

疑問はたくさんあるけどね。

そう、考えれば考えるほど疑問はわく。

思い返せばあの手紙の文面とラピスさんが一致しないのもおかしいんだ。

あんなあからさまに悪党な文章で脅す人なのに、ことあることに私を気遣ってくれた。

ちょっととした仕草や言動から、彼は獣である自分の姿を気にしているようだし、何より動作の全てが上品だった。

本当に野獣か、と問えば「見ての通り」なんて答えたけど、今にして思えばちょっとはぐらかされた気もする。

この城の内装だって彼とはギャップがありすぎる。

おどろおどろしい悪魔より、天使のほうが似合うもの。

それにあのビスクドールたちの存在も、不思議極まりない。

普通じゃないわ。

「絶対何かある」

独り言をつぶやいて、完全に覚醒している体を起こした。

もう一度ガウンを羽織って、近くにあった燭台に火を灯す。

音を立てないように慎重にドアを開けると、そつと廊下に足を伸ばした。

やっぱり不気味だけど、女は度胸よ、いざ進め。

自分で自分を励ましながら、しんと静まり返った暗い廊下を歩き出す。

全神経を目の前に集中させながら辺りを見回すと、当然だけれど壁や天井の様子がぼんやり見えるだけ。

だから仕方なくどこまでどう続くか分からない廊下の先を進むことにした。

しばらく道なりに進むと、突然分かれ道に出た。

まっすぐ進むか、右の階段を上がるか。

ここまでいくつも角を曲がったから、微妙に方角が分からなくなっている。

窓もないから月の位置も確認できない。

城の外観も大きすぎて見えなかったから、この階段がどこへ繋がっているかなんて想像もできない。

さて、どうしようか。

と、迷っていた、その時だった。

ふっと背後に気配を感じてドキリと心臓が跳ね上がる。

直後、それがやけに近付いたのを感じた。

何!?

「ひゃ・・・」

あ! って、叫ぼうとした私の口は、大きなもふもふしたものに塞がれた。

声と空気を一瞬にして押さえ込まれる。

燭台を握ったままだったのは奇跡だ。

瞬間的にパニックになったけれど、見知った瞳を見た途端急激に冷静さが戻ってくる。

大人しくなった私に安堵したのか彼はそっと手を離してくれた。

「ラピスさん？」

「いかにも。こんな夜中にどうした？そなたの部屋はずいぶん遠くにあるぞ？」

「あ、あは」

正直に言ったら怒られちゃうかしら。

笑って誤魔化してみるけれど、ラピスさんは動じない。

「眠れずに探検ごっこか？」

あらら。バレていたのね。

「ごめんなさい」

観念して頭を下げる。

と、ふわり、肩に何かかけられた。

顔を上げると鼻の頭をちょいっと指で突かれる。

いたずらした子供をたしなめるみたいに。

「そんな薄着では風邪をひく。眠くなるまで案内してやるから、それを着ておきなさい」

そう言つと、ラピスさんはくるりと背中を向けて歩きだした。

え、え、え？

「あ、待つて」

慌てて彼の後ろを歩いていく。

案内つて？

彼はいつの間にか私の手から燭台を受け取って、先を照らしながら階段を上がり始めた。

どこへ行くのかしら。

こうして行き先も分からない夜のお城探検が始まった。

階段が上がってすぐの廊下はギャラリーのようだった。等間隔に肖像画や風景画が飾られている。

少し進むと芸術品と呼ばれるたぐいの宝飾品がガラスケースに収められている。

一つ一つに簡単な説明を加えて、ラピスさんは明かりで照らしてくれる。

その中の一つ。

やたらと目を引く美男子の肖像画がある。

不意に私は足を止めてそれを見上げた。

「リリー？」

「あ……」

「気になるか？その絵が」

「はい。とっても気品溢れる素敵の方ですね……」

思わずほうつと息を着くと、なぜかラピスさんのしっぽが大きく揺れた。

ん？

どうしたんだろう。

そう思ったけど、ラピスさんはすぐ

「次の場所へ案内しよう」

と口早に告げて立ち去ってしまった。

私もそれにつられて足を動かすけれど、目の端にある文字が映った。

「ル？ラ？」

肖像画の下に金色の絵の具で何かが書かれていたのだ。

あれは多分名前。

作者の名前か、それとも肖像画の彼の名前か。

どちらにしてもこの暗がりでは、咄嗟に読み取るのは難しい。

なぜかもっと眺めていたくなる絵だったけれど、遠ざかってしまったラピスさんの背中を追いかけることにした。

ラピスさんはまだしっぽを大きく揺らしている。

そうして彼に導かれてたどり着いたのは、大きな真紅の薔薇が咲く小さな部屋だった。

「この薔薇は？」

「魔法の薔薇だ」

言われてみれば、薔薇は鉢植えにされることもなくガラスケースの中でふわふわ浮いている。

魔法？

「全ては魔法なのだ。この薔薇も、私たちの世話をしてくれる人形たちも、何もかも…この城にも魔法がかかっている」

少しだけ忌々しそうだ。

つまりこの城にかけられたらしい魔法は悪い魔法なのだろう。

彼にとっては。

そして全てが魔法なら、ビスクドールたちが喋ったり動いたりするのも納得できる。

もしかしたらこのお城が隅々までピカピカなのも魔法が関係しているのかもしれない。

だってたった二人の人形とラピスさんだけでは、このお城をここまでキレイにするのは無理なもの。

例え全てに魔法がかかっているにしても…ん？

そこまで考えてふと気付く。

何もかも魔法がかかっているなら、まさか、彼も…？

「ラピスさん、あなたにも魔法が？」

問えば、ピクリと彼の耳が動いた。

しかしすぐに彼は私の頭に大きな手をおいて、優しく髪を撫でる。「リリー、これはきつと夢だ。考える事が好きな君の、夢の中の話だよ。さあ、もうベッドへ入っておやすみ」

私の小さな体は瞬時抱き上げられて、そのままどこかへ連れて行かれる。

「ラピスさん」

呼びかけても彼はもう答えてくれない。

その代わり。

笑顔くれた。

泣いているのかと一瞬ドキリとするような、切ない笑顔を。

続く

朝になって目覚めが訪れるのは随分突然だと思う。

起きようと思って意識する必要も無く、体が勝手に目覚めるのかしら。

気がつくといつもより眩しい日差しを浴びてふと瞳を開けた。

ん…ここは…私のベッドだけどちょっと違う。

お城の、お姫様ベッド。

つまり昨日の全ては現実だったてこと。

改めて意識すると、朝から奇妙な感覚に陥る。

怖さはない。

いたって穏やかな一日の始まり。

ベッドから出ると、ジャストタイミングでシシリエンヌがやってくる。

どうやって頃合を見計らってるんだろう。

私の行動が先読みしやすいのか、彼女がとっても優秀だったことなのか。

どちらにしても支度はすぐに整う。

今日のドレスは落ち着いたオレンジ色。

柔らかい素材で作られていて、きつく締め付けるコルセットもない。

昨日に引き続きの心遣いなのかしら。

どちらにしても都会で流行りのコルセットは苦手だから、助かった。

シシリエンヌは私の顔に薄化粧を施すと、昨夜のように食堂まで案内してくれた。

いつでも誰かにエスコートしてもらうなんて、本当のお姫様になったような気分。

食堂につけばそこには既に彼がいた。

「ラピスさん」

「ああ、リリー。おはよう。昨夜はよく眠れたか？」

分厚くて1ページに文字がぎっしり書かれた本を片手に顔を上げてくれる。

しかも鼻にちょこんとメガネをかけて。

えーと。

「お陰様で。ところでそれは近視？遠視？」

「近視だ」

きつと読書する野獣さんは世界であなただけね。

思わず笑顔を浮かべると、ブルンとラピスさんのしっぽが盛大に揺れた。

…もしかしてこれって犬と同じで嬉しいと揺れちゃうの？

それなら今の会話のどこに喜んだんだろう。

疑問が浮かんだけど、答えはすぐにわかった。

「リリーは私の顔を見ても怯えないのか」

小さく彼が呟いた。

なるほど。

喜んだ理由はそれね。

「怖くないもの。夜の探検にも付き合ってくれたし。昨夜はありがとう」

うっかり抱き上げられたまま寝ちゃったくらい、すっかり安心してたことに今更気付く。

短時間で急展開を見せたから、疲れていたのもあるんだろうけど

…。

ラピスさんの腕が心地よかったのも本当だ。

そこでふと思いつく。

昨夜見たあの肖像画。

身分の高い、きつと王子様の絵。

あれは誰の肖像画なのかしら。

聞いたら答えてくれるかどうかと彼に視線を向ける。

碧い目が、穏やかにこっちを見ていた。

「そなたの瞳はよく動く」

「え？…あ、あ！」

言われて気付いた。

そうよ、あの時は違ってた。

昨夜、一度だけ違っていたの。

「ラピスさん、昨夜は私を「君」って呼んだわ」

間違いない！

って、思っただけ。

ラピスさんはクスクスと優しく笑う。

テーブルにはヴィスコンティが運んでくれた、焼きたてのパンやベーコンエッグにソーセージ、オレンジジュースがあったという間に並べられる。

大きな獣の手が目の前にパンを寄せてくれた。

「きつと夢でも見たのだろう。私はいつでも「そなた」と呼んでい
る」

そう言われて納得できるだろうか。

夢って。

昨夜お城と一緒に回ったことは否定しなかった。

私は抱き上げられてベッドまで連れて行ってもらったけど…、そこまで覚えているのに。

ラピスさんが見せた、あの、胸がギュッとするような切ない笑顔
だって覚えているのに。

どこからが夢でどこまでが現実だったの？

分からなくなる。

それなら、と思って

「あの肖像画は誰のものですか？」

と問うことにした。

「誰だったかな。ずいぶん昔のものだ。私も知らない」

「本当？」

「ああ、本当だ」

何だかそつ無くはぐらかされた気分。

私は一口大にちぎったパンを口に入れた。

咀嚼すると香ばしい香りが口いっぱいに広がって嬉しくなる。

向かい側では彼も同じように食事をしていた。

あの口なら一口で食べられそうなパンを、器用にちぎっている。

流れるような動作でジャムを塗る姿は上品そのものだ。

そして不意に私の視線に気づくと、食事を促すように目で合図される。

穏やかな碧い目。

碧い、目。

…そうだ、彼の目も碧かった。

ラピスさんと同じ色。

でも、どうして？

瞬間的にいくつも推測が浮かんでは消えていく。

知りたい。

このどうにもギャップの激しい野獣のことを、もっと知りたい。

魔法がかけられているのだというこの城のことを知りたい。

そうとなったらこのあとの予定は決まったも同然。

「ラピスさん、お城の中をもっと見て回ってもいいですか？」

少し身を乗り出して尋ねると、彼はちよつとだけ考える仕草をしながら

「ふむ。城の中は自由に歩いて構わない。ただし、外に出てはいけない。城の外は危険だから」

そう言った。

城が檻の代わりだからだめ、じゃないところがラピスさんらしい。

魔法がかかった場所ならもしかして、敷地内にも何かあるのかもしれないし、城を取り囲む森にも何かあるのかもしれない。

「分かりました」

私は素直に頷くことにした。

だって外に用事はないものね。

お父さんのことは心配だけど、彼が安心していいって言うならそれは本当だと思うから。

とにかく今はきちんと食事をして、早速あの肖像画を見に行かないきゃ。

俄然やる気の出た私は、用意された朝食をきれいに完食したのだ。
った。

昨夜ラピスさんと辿った道を思い出しながら廊下を歩く。

途中にはやたら大きな観音開きの扉がある部屋もあったし、私の背丈より少し大きめの扉がある部屋がいくつもあった。

だけど目指すのはただ一箇所。

絶世の美男子が描かれたあの肖像画のある廊下。

いくつも角を曲がったあと現れる階段を昇っていく。

一段ずつ上がった先に見えたのは、しばらく使われていないだろ
うギャラリーを兼ねた廊下。

昨日と同じように展示品の間を抜けて、目的の絵を目指す。

…あつた…!!

「これだ…」

見上げればそこには昨夜見たのと同じ、360。どこからみても
優雅で気品のある凛とした王子様。

うん、王子様って言葉がピッタリ似合う。

絵の右下には金の絵の具で書かれた文字。

La…?

他は擦られたような、削られたような跡があって読めない。

それにしても何て素敵な人だろう。

おとぎ話の挿絵に出てくる王子様よりずっとずっと格好いい。

涼やかで理知的な瞳は冷たさを宿すことなく、柔らかく人懐っこい。

肩よりほんの少し長く伸ばされた金髪はゆるく曲線を描いている。王子様（と呼ぶ事にした）の髪は純粋なブロンドよりも、夕焼け間近の黄金色に近い。

頭頂部はオレンジがかっていて、毛先に向けて徐々に色素が薄くなっている。

ロイヤルブルーの上着がよく似合っている。
ん？

黄金色の髪に碧い瞳、それに、ブルーの服…？

私の中で浮かんだ「まさか」が確信に近くなる。
もしかして。

「ラピス…さん…？」

肖像画に描かれた滑らかな頬に手を伸ばす。

「やはりここにいたのか」
ピク

寸で手を止めた。

声の主は今朝と変わらぬ様子でゆったりと近付いてくる。

「旺盛な好奇心は真実を探し当てる、か」

微笑んでいるのに、どこか悲しげだ。

「この絵は、あなたね」

「随分昔のものだよ。今は見る影もない」

おどけて言うけど、ちつとも笑い話にならない。

「魔法はあなたにもかかっている。だから野獣の姿に？」

「そうだ。この姿では人も寄り付かない。疎まれるくらいならいっそ他人と関わるのをやめた。ところが度々迷い込んでくる人間たちを助けようと手を差し伸べれば、彼らは皆一様に私を「人食い野獣」と罵り、怯え、人々に話をしたのだらう。おかげでこの城には誰も近寄らなくなつた」

「じゃあお父さんは久しぶりの迷子？」

「ああ。とても変わっていて、優しい人だな。そなたに…いや、君に、薔薇を一輪どうしても渡したいのだと懇願されたよ」

ラピスさんは昨夜みたいに私を「君」と呼んで、僅かに口調を変えた。

というより、戻したんだろう。

肖像画の王子さまがラピスさんならそうね、やっぱり「そなた」より「君」が合ってるもの。

「薔薇を？」

私は問い返す。

お土産はいらさない、大丈夫って言ったのに、お父さんたら。

嬉しくなって頬が緩む。

すると、大きな手が私の髪をそつと撫でてくれた。

「健気な一人娘にせめてもの土産にしたいと言ってね。彼は私を見ても怯えたりしないし、普通に話してくれた。君のことも色々教えてくれたよ。意地悪な継母と姉妹に嫌がらせを受けながらも彼を助け、一生懸命家事をしている働き者だよ」

「お父さんの方が働き者よ。それにお人好し」

「ならば君はお父さんに似ているな」

「どうして？」

「こんな姿の私と普通に会話してくれるし、微笑みかけてくれる。さらに私の正体に気付いた」

「でも最初は怯えちゃったわ。ごめんなさい」

「謝ることはない。あの場面では誰でも怯えるだろう。それに怯えてもらわなければならなか…」

「え？」

「あ。いや、いいんだ」

明らかに「マズイ」って顔をして取り繕い始める。

今絶対失言ですね？

ちよつと目を細めてじつとみつめると

「いや、その、あー、うん」

碧い目がぐるぐる泳いでる。

この様子だとピンと来ちゃったわ。

「お父さんが何か企んだ？」

だって私の手元にお父さんが懇願したという白い薔薇は届いていない。

それにこんなに素直で紳士なラピスさんが悪巧みできるはずないもの。

知恵を貸したとすればお父さんだけだ。

私は彼の沈黙を肯定と受け止めた。

「どんなことを企んだのかは分からないけど、あなたが王子様で魔法をかけられてしまったってことはよく分かった。そうすると疑問は一つだわ」

「疑問？」

「あなたの魔法はどうすれば解けるのか、ってこと」

「…」

ラピスさんの目がパチパチ瞬きをする。

そうね、ここからが本当の始まり。

続く

ギヤラリーを兼ねた廊下の端には、展示物をゆっくり眺められるよう大きなソファがしつらえてある。

深いエンジ色のビロードでカバーされた、クッションの良いものだ。

ほんの少し腰掛けただけで体がグツと沈み込む。

油断すると後ろへひっくり返りそうになるのを、ラピスさんはそっと支えてくれた。

腹筋に力を入れて前かがみの姿勢を保ちながら彼の方へ向き直ると、ふわりとした獣の手が私の手を引いてくれた。

これで腹筋の力を緩めても、ひっくり返らないで済む。

彼の手はほんわか温かい。

「ありがとう」

「どういたしまして」

さりげなくこういう事してくれちゃうところがニクイっていうか、何だか照れくさいというか。

あくまでも自然にやってのけちゃうしね。

頬が熱くなっちゃうのは私だけなんだもの、ちょっとクヤシイ。

だけどそんな気持ちを表に出すのはもっと恥ずかしいから、私も気にしないふりで手を引いてもらうことにする。

聞きたいことがたくさんあるんだから。

「ねえラピスさん、どうして口調を変えてたの？それに「そなた」なんて呼んだりして」

「少しでも威厳がある方がいいと言われたからだ。気さくな話し方ではちっとも怖くないと言われたよ」

妙なアドバイスをしたのは間違いないとお父さんね。

本来のラピスさんは心地よいテナーで、語りかけるように話をし

てくれる。

堅苦しさも気難しさもないし、荒々しさなんてもつてのほか。最初からこの調子で話をされたら、私もきつと怖がる必要なんてなかった。

いや、外見だけを見ればやっぱり怖がったかもしれないけど、多分話しているうちに「何か違う」と思っただろう。

お父さんは私がそう思うことを知っていたんだ。

だから怖がらせるために演技をさせたのね。

自分も最高に怯える演技をした上で。

「一体お父さんとどんな話をしたの？あの手紙の文章もお父さんが考えたんでしょう？」

言えばギクリ、彼の表情が強ばる。

「あんな悪党めいたセリフ、あなたには似合わない」

「そ、そうか？」

気まずそうでいて嬉しそうな、複雑な表情を浮かべた。

そんな仕草はイエスって言ってるのと同じ。

今まで彼を「人食い野獣」なんて言いふらした人ははっきり言って大馬鹿だわ。

彼が本当は優しい人だってこと、一晩も経たないうちに分かっちゃうのに。

「で、どうしてお父さんは囚われたふりを？」

そう問いかけると、彼は急に真剣な表情に戻ってまっすぐこっちを見た。

「困ったな」

「え？」

「言わない約束なんだ」

「約束？」

「彼は私のことを他言しない。代わりに私も彼の事情は君に話さない」

「どづいづいと？」

「彼の望みだよ。ただ、彼は君をあの家から解放したいと言っていた。そのためにはこうでもしないと君は彼を助けるためにあの家を出ないだろうからと」

頭をガツンと殴られるくらいの衝撃だった。

彼の口から語られたお父さんの思いは、予想もしていなかったから。

「私を、解放？」

「あのままだと君は一生継母たちにこき使われて、花咲く時期を何の楽しみもなく過ごしてしまふことになる。彼は君に自分自身の人生を送って欲しいと願っていたよ」

「自分の、人生を……」

「モンスターたちの言いなりになるしかなかった彼は、自分自身を責めていた。君を巻き添えにしてしまったから。彼は今でも君の亡くなったお母さんだけを愛しているんだよ。その思い出と君を守るために再婚した」

「何ですって……？」

急激に怒りがこみ上げてくる。

あの人はまさかお母さんと私を人質にしたの！？

どうしてそんな……どうして……？

感情が渦巻き始める。

元から嫌いな人間に怒りを向けるのは簡単だ。

憎しみだつて楽に倍増される。

無意識に握り締めた拳は爪が食い込んで血を滲ませていた。

「リリー」

その手を、温かな手が解いていく。

「ラピスさん……？」

「いけない、自分を傷つけては」

「あ……」

「激しい怒りや憎しみは瞳を濁らせる。真実が見えなくなってしまふよ……」

小さな子供をあやすように宥められればそれが尤もだと頷ける。
昂った感情は思考を鈍らせるだけ。

あの人の思うツボなんて絶対にごめんだ。
だとしたら、今の私にできることは何？
やらなきゃいけないことは？

「助かるならみんな一緒よ」

「うん？」

「あなたは魔法から、私とお父さんはあの人から。みんなが解放される方法を考えなくちゃ」

「…全てを叶えるのは難しいと思うが」

碧い瞳が曇る。

酷く悲しげな痛みが浮かんでいる。

ラピスさんはきつと魔法は解けないと思ってる。

長い間解けずにいるのだから無理もない。

でもね、毒には必ず解毒剤があるのと同じ。

どんな魔法だって絶対に解く方法があるはず。

一人じゃどうにもならないことも、一緒ならどうにかなるものだから。

「きつと見つかるわ。元の姿に戻る方法が」

「…ああ」

歯切れの悪い返事だ。

「どうしたの？ラピスさん」

「ん、いや…そうだな、リリーが言うなら見つかるかもしれないな、私に戻る方法も」

「うん」

ラピスさんは不意に眉を顰めて、微苦笑を浮かべようとした。
それは失敗して悲しげな顔になっていたけれど。
どうしてそんな顔をするの？

心に浮かぶ問いかけを、口には出来ない。

呼び止めることもできないまま、少し肩を落とした彼はそのまま

どこかへ立ち去っていった。
寂しげな後ろ姿を残して。

続く

VoI・7 秘めた願い(前書き)

一気に時間が経過しております。どうしてもラピス視点を書きたか
ったのです。

Vol. 7 秘めた願い

その薔薇は宵闇の中でもはつきりと輝いていた。庭園に植えた薔薇ではない。自然に生息するはずのない薔薇だ。私の運命を告げる真紅の薔薇。

「みんなが解放される方法を探さなくちゃ」

あの日彼女はそう宣言した。曇りなき無垢な瞳は一層輝きを増して見えた。嬉しくないはずはなかった。

何も知らない彼女の言葉は、ただ、私にとって少しだけ残酷だったのだ。

そして黙っていることしかできない自分の無力さを呪った。本当は全て分かっている。

私とこの城にかけられた魔法の解き方も、彼女の継母の正体も、何もかも。

リリーの父親も同じだ。全て知っている。

けれど口に出すことは禁じられていた。かけられたのは「魔法」という名の「呪い」。解き方を言おうものなら即座に声を奪われる。だから彼女自身に気付いてもらう必要があるのだ。

リリー、君は知らないだろう。自分がどれほど重要な鍵を握っているか。彼女が来てから3週間が経つ。

あれからリリーは毎日魔法を解く術を探し続けている。一日の大半を書庫で過ごし、最初は一文字も読めなかった古文書

も、今では半分以上読み進めただろうか。

突然行動を起こした彼女を心配したヴィスコンティとシシリエン又はこまめに休憩するよう私に進言してきた。

さらに二人のおかげで私はリリーの指南役になっている。

古文書を読めるのは私だけだと彼女に伝えたい。

私は既に研究し尽くした古文書を再び彼女と読み解くことになった。

自分で読めるのだから、書かれていることが真実ならとくに私は元の姿に戻っている。

彼女もそれに気付くはずだと二人に言えば、古文書はリリーが初めて見つけたということにしておいた、などと言う。

おかげでリリーと過ごす時間が増えたのだから喜ばしいとは思いますが、良心が痛むし罪悪感が拭えない。

しかし彼女は真つ先に私を元に戻そうとしてくれている。それが何より嬉しかった。

父親のことも早く助けたいと願っているだろうに、私を優先してくれた。

希望は潰えていないのだ。

それならばと、私は彼女の父親が行っていた通り、リリーに接してみることにした。

リリーはしっかり者だが、空想するのが好きらしい。

家事の合間には勇者や王子、お姫様に魔王、ペガサスにフェニックス…とにかく冒険やハッピーエンドの恋物語を好んで読んでいたという。

いつか王子様が、と夢見ていたらしい。

だからリリーに魔法を解かせるのなら、本物の王子であることを最大限利用しろ、と言われた。

現実の王子様は物語の王子さまよりずっと素敵だろうから、と。

そのアドバイスに従って、常にリリーをお姫様扱いしてみると、彼女は予想外の反応を見せた。

私にとっては何の苦もなくできる立ち居振る舞いとエスコートだが、慣れていないリリーはいつも顔を真っ赤にしてソワソワしている。

人に甘えることもなく、夢中で家事をこなしてきたリリーだ。突然蝶よ花よと大切に扱われることが照れくさいらしい。

慌てる姿も戸惑う姿もどうにも可愛くて、私を喜ばせるだけなのに、リリーは相変わらず私に手を引かれるたびに小動物のような動きをしてみせた。

さらに、一緒に過ごしているうちに分かったのだが、彼女は何もないところで躓くという癖を持っている。

エスコートされると慌てるから、余計躓きやすくなるのだが、それを抱きとめるのも私の役目になっている。

役得だ。

獣の腕に抱きとめられても彼女は嫌がらない。

ホツとしたような顔でこちらを見上げて屈託なく「ありがとう」と言う。

思わずギュッと抱きしめたい衝動に駆られるが、どうにか抑え込むのに必死になる。

私の心臓は早鐘を打ちっぱなしだ。

彼女の澄んだ瞳が

りんごのように色づく頬が

瑞々しく輝く薄桃色の唇が

絹糸のように柔らかく滑らかな髪が

真っ直ぐ人を思いやる温かな心が

時折この獣の手をぎゅっと握る小さな手が

彼女のすべてが

愛しい。

けれど。

目の前でひとひら、花びらが散る。

私に残された時間はあとどれくらいなのだろう。

花びらの数は大分少なくなった。

リリー、君は私をどう思っている？

恋でなくとも君の思う「好き」の範囲内に入っているだろうか。

私の運命は君が握っている。

どんな結末を迎えても、受け入れる覚悟はとっくに出来ている。

それでも一縷の望みに賭けてみたい。

醜い野獣の真実を見つけた、奇跡の瞳。

君がこの呪いを解いてくれる。

そう、信じたい。

リリー…

心から、強く願った、その時だった。

「ラピスさん」

不意に背後から声がした。

思いもよらない偶然に驚きながら振り向くと、そこには明らかにしゅんと両肩を落としたリリーの姿がある。

一体どうしたというのだ。

初めてここへ来た時以来見せたことのない姿に嫌な予感がよぎり、彼女に歩み寄ろうとした。

が、途中で足を止めることになる。

「ごめんなさい」

とめどない涙が彼女の頬を伝っていた。

小さな歩幅でこちらへ駆け寄ってくる。

両腕で抱きとめると、リリーはそのまま静かに私の胸に顔を埋めた。

「リリー、何があった？」

「…なかった」

「うん？」

「見つからなかった。どこにも、なかったの。何が、などと問う必要はない。」

必死に古文書を読み進めたのだろう。

恐らく全て読み終えたに違いない。

けれどそのどこにも魔法を解く術は載っていなかった。

そういうことだ。

彼女は自身の希望を古文書に見出した。

だから懸命になって読み解いてきた。

あれが「魔法」だと信じているから。

その懸命さが今は仇になっている。

痛いほどリリーの思いが伝わる。

しかし、まだ、だ。

「泣くのは早いよ」

「…え？」

「君がいる」

「っ、私っ？」

しゃくりあげながらリリーが顔を上げる。

そつと体を離して彼女を見つめれば、丸い瞳が赤く腫れていた。

「魔法を解く鍵はリリーだと信じてる。だから泣かないで」

「鍵が、私？」

「そう。君の涙が、思いが、必ず魔法を解いてくれる。君が、希望だから」

信じているよ。

いつか私の思いが届くことを。

そうしてもう一度腕の中にリリーを抱きしめた。

続
く

Vol. 8 デイナーパーティー（前書き）

年の瀬間際に始めた「小説家になろう」での活動ですが、本年はこの作品でしめくくる形となりました。

まだまだ連載は続きます。ほかの作品ともども、来年もどうぞよろしくお願いいたします。

皆様に幸せがたくさん訪れますように…よいお年を！

Vol. 8 デイナーパーティー

とある朝、珍しく活発な様子の子のラピスさんが食堂で宣言した。

「今夜はパーティーを開く。それぞれに準備をお願いしたい。念入りにな」

グイスコンティとシシリエン又はすぐに頷くと、あっという間にどこかへ行ってしまった。

けれど彼は

「久しぶりの宴になる。アロルド、窓やカーテンを頼む。ブルーナはチェレスティーナやカルロッタと共にフロアをよろしく。クラウディアにジュリアーノは楽器の用意を。手入れはフラヴィオ、任せたぞ。厨房はパトリツィオ、取り仕切ってくれ。さて、手の空いている者は二手に分かれるぞ。一方はウンベルトと庭園の手入れを、もう一方は私とリリーを手伝って欲しい」

次々に指差しながら指示を出していく。

まるでオーケストラの指揮者みたい。

この後何が始まるのかと思って彼の指先を目で追うと、思ってもみないことが起こり始めた。

近くに置かれていた小道具たちが動き出し、蜘蛛の子を散らすように四方八方に散らばっていく。

コート掛けも足置きも、羽ホウキやタワシにチリトリも、工具箱までするすると動いて食堂を出て行った。

食堂は必要最低限のものだけが置かれた殺風景な部屋になる。

「これも魔法？」

「驚いたか？」

「もちろん！しかも名前がついてるなんてびっくりだわ。もしかしてみんな…」

「昔からこの城に仕えている者たちだよ。魔法のせいで姿は変わってしまったが、あの頃と変わらぬ忠誠で今も私を支えてくれている」

「そうだったの…。みんなの魔法はどうしたら解けるの？」

「おそらく私の魔法が解ければ、この城ごと全て元に戻るはずだ」
さりげない口調で彼は言う。

「リリー、だからと言って責任を感じる必要はない。今はとにかく
今夜に備えなくては」

ともすれば落ち込みそうになる私のことなんてお見通しなんだ。
楽しいな瞳で私の顔を覗き込んで、食堂を出るよう促す。

今夜パーティーを開くなんて突然の提案に、城中が浮き足立って
賑やかだ。

廊下に出ると楽器を調律する音色や床を磨く音がする。

ラピスさんは満足げにそれらを眺めて、私の肩を抱きながら部屋
までエスコートしてくれる。

「きつと部屋ではシシリエンヌが取って置きドレスを用意してい
るはずだ。目一杯おめかしをしておいで」

「おめかし？」
「ああ。おとき話には「舞踏会」があるだろう？それを今夜開くん
だ」

「本当？すごい！素敵だわ！！」

「喜ぶのはまだ早い。さあプリンセス、お支度を」

そう言って部屋の前で跪くと、手の甲に一つ、キスをくれる。

私の顔は瞬間的に沸騰した。

プ、プリンセス！？

心底楽しいな笑みを浮かべるラピスさんは、さしずめイタズラが
大成功した子供みたいな目をしてる。

最近彼はこうやって私をからかうのが好きらしい。

いい加減慣れればいいんだろうけど、生まれてからずっとこんな
上流階級な暮らしとは縁がなかったから、一ヶ月くらいじゃ変われ
ない。

元々王子様のラピスさんにとって、さっきみたいなキスは当たり
前の挨拶なんだろうけど、何だかちょっとズルイ。

ドキドキしちゃうのはいつも私なんだもの。

彼はいつだって余裕な顔して飄々と振舞うんだから。

きつと魔法をかけられる前から素敵な王子様だったに違いない。

そう思ったら、トクンと、鼓動が跳ねた。

マズイ、また顔が熱くなってきた。

「それじゃあ王子様、また後ほど」

「ご機嫌よう」

クスリと笑って互いに視線を交える。

彼の後ろ姿を見送れば、やっぱりしつぽが大きく揺れていたのだ。
った。

ダンスホールの天井には目が覚めるような青空に白い雲、小悪魔
ちゃんたちが戯れている天井画。

特大サイズの5段シャンデリアがキラキラ輝いて、壁に掛けられ
た小さな照明用のシャンデリアも眩しいくらい煌めいている。

壁際にはピアノやヴィオラ、ヴァイオリンにフルートといった楽
器たちがスタンバイ済み。

磨き上げられた長テーブルの上には豪華な燭台の炎がゆったりと
揺れていた。

ホールにつながる大階段の踊り場へたどり着くと、ベロア生地で
作られた深緑色のジャケットを颯爽と着こなしたラピスさんが待っ
ていて、すっと肘を構えてくれた。

促されるようにしてそこに軽く腕を絡めると、ふわりと揺れるレ
モン色のベルラインドレスとハイヒールで心もとない歩き方をした
私を気遣うように、彼は歩調を緩めて階段を下りていく。

半日ぶりに再会したラピスさんは普段より一層凜として、重厚な
オーラが全身を覆っていた。

まるで本当に王宮の舞踏会に来たみたいなき分になる。

自然と背筋が伸びて、いつもより胸を張れる。

くるくると内巻きにして、後頭部を高く結い上げた髪はシシリエ
ンヌの力作だ。

耳たぶで揺れるイヤリングは大きな雫型のパールで、胸元にはル
ビーをあしらいたいダイヤモンドを散りばめた高価なネックレス。

せめてこの姿に相応しい心持ちでいよう。

そう決めて彼と歩き出せば、目の前には完全なる夢の世界が広が
る。

フロアに降りるとヴィスコンティが椅子を引いてくれた。

私とラピスさんが席に着くとすぐに演奏が始まって、ホール中の
証明が曲に合わせて揺れる。

用意されたフルコースは鮮やかにお皿を彩り、目まで楽しませて
くれる。

ふと彼を見れば、優しく視線が重なった。

「踊ろうか」

「はい」

彼に手を引かれて立ち上がり、フロアの中央まで行く。

背中に添えられた手を感じると、初めてのことにちょっとだけ緊
張して力が入る。

強ばりに気付いたラピスさんは柔らかく微笑んで

「力を抜いてごらん。大丈夫、私に任せて」

そう言った。

うん、大丈夫。

彼に言われるとどうしてすんなり信じられるんだらう。

言われた通り力を抜いて導かれるままの姿勢を取り、ラピスさん
を見上げる。

その先に澄んだ碧い瞳。

見つめていると吸い込まれそう。

でも逸らすことも出来ないくらい魅せられている。

そうしているうちに彼の優しい吐息が聞こえた。

「今夜のリリーは今までで一番美しい。そんなに見つめられたら私が緊張してしまうよ」

「…ラピスさんたら」

「君のファーストダンスの相手になれるとは…とても光栄だ。さあ、曲に合わせて右足を引いて」

「はい」

まるで夢見心地。

促されるように足を引けば、そこから滑らかなステップが続いていく。

踊ることを気持ちよく感じるくらい、スムーズで優雅で、柔らかい誘導。

歩幅は全然違うはずなのに、そんなこと気にならないくらい上手にリードされる。

どんなにくるりと舞続けてもすぐ近くに彼の瞳があって、何故だかわからないけど一瞬たりとも逸らすことなんてできなかった。

丁寧に梳かれた黄金色のたて髪が揺れる。

そして彼の姿に肖像画の彼が重なって見えた。

ああこの人はこんなにも優しいのに、どうして獣の姿にされてしまったの？

こんな姿になっても変わらず人を想う気持ちを持ち続けて、温かな思いに溢れているのに。

「人食い野獣」と罵られても手を差し伸べる優しさに満ちた人なのに。

どうしたら元に戻せるの？

あなたにかけられた魔法はどうすれば解ける？

私に出来ることは何？

そう、思った時だった。

「きゅん」

コッソソと踵が床に触れた瞬間、僅かに滑ってバランスが崩れる。

はずみでポスン、と温かな胸に抱きとめられた。

そのままぐつと抱きしめられる。

胸が、痛い。

おずおずと大きな背に腕を回せば、彼の腕は更に力を込めて私を抱き込む。

それが酷く切なくて、喉が詰まる。

「リリー……」

苦しげに呼ばれれば、もしかして彼も同じ思いなのかもしれない、なんて思ってしまう。

徐々に速度を上げる鼓動と、体中をめぐる熱が痛いくらい呼吸を奪っていく。

ラピスさん。

縋るように頬を押し付ける。

彼の大きな獣の手が穏やかに私の髪を撫でてくれる。

それがすごく嬉しくて、心臓が一際大きな音を立てた。

ようやく顔を上げれば再び互いの視線が重なって、次第に近づく距離に視界はもうぼやけていた。

ちゅ、と音を立てて柔らかな唇が額に触れる。

「おいでリリー。少し風に当たろう」

気付けば彼の手も確かな熱を孕んでいた。

続く

テラスは少し冷たい風が吹いていた。

熱くなった頬を冷ますにはちょうどいいかもしれない。

けれどリリーの細い肩はすぐに凍えそうに心配で、来ていたジャケットをかけてやると彼女は嬉しそうに笑って礼を言いながら、私の肩にちよこんと寄りかかる。

もう他の音など聞こえないほどに私の鼓動はうるさく鳴り続けている。

ダンスは互いの心を近付けるとはよく言ったものだ。

大人しく抱きしめられていたリリーは頬を寄せてくれた。

額へのキスも許してくれた。

全て嬉しい誤算だ。

しかしあれ以上そばにいれば、先を求めてしまそうだった。

貪欲に、今の自分を忘れて想いを告げようとしてしまいそうだった。

ともすれば溢れそうになるこの想いを押し込めるのは大変だ。

そこへ来て今の状況となれば、予想外もいいところ。

我慢大会になりそうな予感を抱きつつ、それも幸せな試練だと、肌寒そうなりリリーを少しでも温めたくて肩を抱きしめた。

リリーの瞳が不意にこちらを見上げる。

「ラピスさんはどうして魔法をかけられてしまったの？」

当然の問いかけだった。

いつか聞かれるだろうと思っていたが、隠す必要もないだろう。

私は古い昔話を紐解くことにした。

「心から愛する人と結ばれたいと願ったからだよ」

そう告げれば彼女瞳はみるみるうちに丸く見開かれる。

「かつて私にはまだ思い人もなく、愛や恋というものがどんなものか分からなかった。そこへ結婚を申し込まれたが、とても乗り気に

なれず丁重に断りを入れた。それが相手の気持ちを逆なでしてしまつたらしい。ある日魔女が現れて、突然魔法をかけられたんだ。この城ごと、魔法が解けるまで永遠に苦しむがいいと言つてね」

この城は私の檻。

醜い獣の姿で永久を生き、苦しむための場所。

城を明るく飾っていた天使の彫刻や天井画は全て悪魔や魔物に変わった。

壁に這っていた緑の鳶は、触れた者全てを傷つける茨に変わり、辺りの森は悪霊がさまよう朽ちた森に変化してしまった。

来訪者を遠ざけるためではない。

私を世界から隔離するためだ。

そうである以上希望など持てるはずもなかった。

本当は諦めていたのだ。

元に戻ることも、ただ長らえるだけの寿命を終えることも。

淡々と過ぎていく日々を、もう長い間過ごしていたから。

「けれど、君が来た。本当は飛び跳ねるほど嬉しかったんだ」

「本当？」

「もちろん。だから懸命に恐ろしい野獣を演じたけれど、冷酷無比な姿を貫くことは出来なかった。君を傷付けたくなかった。絶望した顔を見た途端、後悔したよ。例えば君のお父さんのアイディアとしても、言う通りにするべきじゃなかったと」

私と同じ絶望感など、抱かせてはいけなかったんだ。

それからはどうすればリリーの心を癒すことができるか必死だった。

今までにないほど。

初めて微笑んでくれた時は本当に嬉しかったんだ。

しかもリリーは自ら魔法を解こうとしてくれた。

だから希望が持てたんだ。

もしかしたら、と。

でもね、君はこのままで幸せかい？

元から自由の身なのに、魔法が解けるまでここにいることが君の幸せなのか？

私はまた間違えようとしているんじゃないのか？
大切な人を巻き添えにしようとしている。
そんな身勝手な思いは本当の愛とは違う。

…だから。

「リリー、一つだけ正直に答えて欲しい」

「え？」

「家に帰りたいと思うか？」

解けるかどうかわからない魔法のためにここに残るより、君を思う父親の元に、生まれ育った街に戻った方が幸せなんじゃないのか？
…？

口にした途端胸が締め付けられて、思わず彼女を抱きしめる腕に力が入ってしまう。

これでは引き止めているのと同じだ。
彼女を解放したいのに。

いつまでリリーの優しさに甘えるつもりなのだ、この体も心も。早くも後悔の念で一杯になる。

が、不意に彼女の細い指先が私の頬に触れた。
くるりとした瞳が真っ直ぐこちらを捉えている。

「私、帰らない」

きっぱりと、そう言った。

一瞬耳を疑う。

帰らない？

その時の私はよほど間の抜けた顔をしたのだろう。

リリーはクスクス笑って私を見つめた。

「だって私はあなたの希望でしょう？それなら魔法を解くまでここに
いる」

「しかし」

「お父さんだって私が家に戻ることを望んでいないわ。あの家から

離すためにわざわざラピスさんを巻き込んでひと芝居打ったのよ？
そこまでしてもらったのに、途中で放り出して家に戻るのなんて嫌
よ。…でも」

「リリー？」

「お父さんには会いたい、かな」

少し寂しげにそう告げた。

たった一人の肉親だ、会いたくないはずがない。

それならばと、ヴィスコンティを呼んであるものを持ってきても
らう。

星空を映し出すそれは、ガラスで出来た大きめの手鏡。

「見たいものを願って鏡を見るとそれが映る。魔法の鏡だ」

「魔法の、鏡…？」

「私と外界を結ぶ唯一の道具だ。願いを言っごらん」

そう促すと戸惑いながらリリーは鏡を受け取り

「お願い、お父さんに会わせて」

躊躇いがちに口を開いた。

鏡は淡い光を放ち、次の瞬間、そこには思いも寄らない光景が映
しだされていた。

寝室に置かれた簡素なベッドの上、苦しげな呼吸を繰り返す横た
わる、彼女の父親。

「う、そ…お父さん…お父さん…!？」

”リリー…”

「嘘、嘘でしょう？お父さん！私はここよ、ここにいる！ね、返事
をして！」

”すまない…リリー”

「どうして？何でそんな姿になってるの？ね、お父さん!!」

「リリー、君の声は聞こえない。多分うわ言だ」

「そんな…お父さん、あんなに元気だったのに。どうして？一体何
があったって…?」

ひどく取り乱すリリーを宥めるように抱きしめれば、彼女の頬を

伝う涙がこぼれ落ちてくる。

それを指でそっと拭ってやりながら、髪をなでた。

あの継母の正体を知らないリリーには想像もつかないだろう。けれど私は知っている。

どうすれば彼を助けられるかも、様子を見れば大体分かる。

私に出来ることは、ひとつだけ。

「リリー、今すぐ支度をして家に戻りなさい。彼を助けられるのは君だけだ」

「でも」

「大丈夫。私も手伝うから。城にある解毒剤を持っていくといい。

それから、これも」

「えっ」

彼女の手に手鏡をしっかりと握らせた。

唯一私とリリーをつなぐもの。

きつともう二度と会えなくなる。

それでも今を逃せば絶対に後悔する。

だから。

「お父さんを助けてあげるんだ。君ならできる」

「うん。助けたら、必ず帰ってくるから。だから待っていてくれる？」

「もちろん、ずっと待っているよ」

「ありがとう、ラピスさん！」

ぎゅっと抱きつく彼女をしっかりと抱きしめて、それからそっと解放する。

ずっと待っている。

魔法が、呪いが完成すれば恐らくこの城は全てのものから私を隔離するだろう。

それでも、それでも。

「シシリエンヌ！すぐにリリーの支度を！ヴィスコンティは解毒剤と馬を用意してくれ！」

二人に告げて私はリリーの背を押した。

何か言いたげな瞳が振り向くけれど、引き留めはしない。そうして支度の整ったリリーはすぐに城を飛び出していった。窓から見えるのは遠ざかる小さな背中。

…これほど、苦しい思いがあるとは思わなかった。

人を愛することが、こんなに切ないものだと思わなかった。

けれどもはっきり分かったことがあるんだ。

リリー。

君のおかげで私は幸せだったよ。

共に過ごした温かな時間を、ずっと胸に生きていける。

永久の苦しみを抱くことになっても、君との思い出があれば大丈夫。

リリー…。

最後に一言、告げたかった。

許されるのならば、ひとつだけ。

愛しているよ…。

続く

久しぶりに見る我が家は何だか小さく見えた。

急いで馬を降りると玄関に駆け寄る。

慌てているせいか足がもつれそう。

うまく動かない体を必死で動かして、小さなドアを勢い良く押し開ける。

「お父さん!!」

声が、奇妙にこだました。

家具一切が消え失せた居間。

食器も調理器具もホウキもない。

火の消えた暖炉は灰だけがこんもり積もっていて、およそ人の住んでいる家とは思えなかった。

「…お父さん？」

衣擦れの音一つしない。

一歩歩くたびにホコリが小さく舞う。

いくつもある部屋を全て探すけれど、どこもがらんどろつになっていて、廃屋のよう。

そして最後の扉に近付いた時だった。

「…リリー…」

微かに呻く声がする。

「お父さん!？」

ぐっとドアを開けて愕然とした。

「どうして、こんな…」

げっそりやせ細った体は骨と皮だけで、髪も真っ白になっていた。目を開けようにも力が入らないらしい。

それでも何とか腕を動かして、骨ばった手が私を探していた。

「リリー」

「お父さん、私。ここにいるよ。帰ってきたの」

「かえ、つて、きたのか…なぜ…」

「魔法の鏡で見たの。お父さんが苦しんでる姿を。だから」

「げ、なさい」

「え？」

「にげ、な、さい」

「逃げる？」

「どうして？」

「魔女が、お前を…ころ、そ…とし、ている」

「え…？」

「ユリアーナに、そつくりの、お前を…」

そう言ったお父さんの枕元には割れたフォトスタンドがあった。私たち家族の写真。

幼い頃、まだユリアーナ母さんが生きていた頃の、三人の写真。

つまり「あの人」は、お母さんに嫉妬したつていうの？

だから似ている私を殺す？

「お父さん、わかったわ。でも逃げるなら一緒よ」

「リリー…」

「これを飲んで。ラピスさんがくれた解毒剤よ。これをくれたつてことは、お父さんは毒を盛られたのね？」

そつと上半身を起こして、小瓶に入った液体を少しずつ飲ませていく。

お父さんは苦味に顔を顰めたけれど、抵抗することなく全てを飲み干してくれた。

即効性があるらしいそれのおかげで数分後にはお父さんの呼吸も落ち着き始めた。

「ラピスさんから聞いたわ。お父さんが再婚したのは私とお母さんとの思い出を守るためだった、つて」

「そうか…。彼の言う通りだよ。そうしなければ彼女は幼いリリーを殺すと言った。さらに私たちの記憶からユリアーナとの思い出も消し去るとね」

「あの頃からずっとどうして再婚したのか疑問だったけど、ようやく全てつながった。ありがとうお父さん」

「お礼を言われる資格はない。父さんのせいでリリーを巻き込んでしまったんだ」

「うっん、お父さんは悪くない。でも、どうしてあの人はお父さんと結婚を？」

「歪んだ愛情、いや、執着と言った方が正しいんだろうな。若い頃、街に出稼ぎに行っていた時に見初められたらしいが、私には既にユリアーナがいた。実はユリアーナは聖女の血を引いていたから、彼女は手出しできなかつたようだ。だからユリアーナが亡くなったのをいいことに、私たちに接近してきたんだ」

「じゃあお母さんも聖女だったの？」

「ああ。しかしユリアーナはほのぼのした性格とは反対に、教会で大人しくしている質ではなかつたから、私と結婚して街を出たわけだが」

「聖女とは代々神の加護を受け、聖なる力で守護されるという「巫女」のような存在だ。」

「ということは、そんなお母さんに手を出せなかつた「あの人」は邪悪な存在…。」

「しかもお父さんを脅して結婚したってことでしょうか？」

「お母さんとの思い出を消すこともできるなんて、まるで魔法つか…え？」

「まさかあの人、魔女なの？」

「その問いかけに、お父さんは静かに頷いた。合点がいく。」

「ついでに言うならもう一つ理解ったことがある。」

「邪悪な力を操るのなら、それは魔法であつて魔法じゃない。」

「まるで異質なもの。」

「ラピスさんを野獣にしたのは呪いの力だつたんだ…。だとしたら、その魔女は…？」

「魔女は魔力を持っている。殺されない限り数百年生きられるぞうだ」

「数百年！？じゃああのうん百歳ってこと！？」

それでお父さんを見初めたって？

どんだけシヨタコンなのよ！！

別の方向でツッコミを入れたくなる。

「ちなみに彼女の母親は、ユリアーナの5代前の先祖に負けたぞうだ」

「え？」

「もちろん、恋愛で」

「はあ！？」

「因縁というやつだな」

いやいや、冷静に言われても困ります。

非常に迷惑な話だ。

それとこれとは別だろうに。

性悪魔女親子め。

と、心の中で悪態をつく

「リリー、随分と体も楽になってきた。今すぐここを離れよう」

お父さんはベッドから起き出して、さっと支度を済ませていた。

ああそうだった。

殺されるから逃げろって言われてたんだっけ。

私も慌てて用意する。

と言つても持ち物なんてお城を出た時に持ってきたショルダーバッグ一つだけだ。

あの人ってば私の持ち物も全部処分したのね。

腹立たしいけど仕方ない。

命の方が大切なもの。

お父さんは枕元にあったフォトスタンドから写真を取り出し、大事そうに胸元にしまいこんだ。

そしてしっかりした足取りで部屋を出る。

私もそれに続いた。

とにかく急いでここを出なくちゃ。

足早に玄関へ向かう。

外にはラピスさんが貸してくれた馬がいる。

あれに乗ればすぐお城へたどり着けるだろう。

そう思った、直後。

「あーら、どこへ行くこうっていうの？あなたたち」

ぐらりと黒い影が揺れる。

思わず目を閉じた。

嘘でしょう？どうして、このタイミングで現れるのよ…。

「逃げようとしても無駄よ。リリー、あなたよくも邪魔をしてくれるわね。どこの野獣だか知らないけど、とつくに喰われたと思っていたのに、のこのこ戻ってくるなんて。しかも解毒剤まで持って！」
「どこの野獣だか、ってあなたが彼をあんな姿にしたんでしょ！？」

「昔の事すぎてどの野獣のことだかさっぱり分からないわね」

「何ですって？」

「これでも私、優秀な魔女なの。おかげであの頃はあちこちの姫君から引つ張りだこでね。そうでなくとも私を侮辱する男どもが多かったから、片っ端から魔法をかけてやったわ。今頃どうしてるかしらね」

「魔法なんかじゃないわ。呪いよ！この人でなし！！」

「人でなし？痛くも痒くもないわね、そんな言葉。欲しいモノが手に入らないなら、どんな手段でも使うわ。それにね、思い通りにならないものなんていらないの。せいぜい苦しめばいいのよ。私を苦しめたんだもの、当然でしょ！？」

そう言っって目を剥く姿は魔女というより化け物だ。

醜い心は容姿に現れる。

「…だからよ」

「何？」

「そんな醜い心をしてるから、誰もあなたを愛したりしないのよ」

「…何…？」

憎しみと怒りを込めたどす黒い感情が彼女を支配する。

ギツと睨みつけてくる視線は鈍い光を放って、鋭く私の心臓を射抜く。

何！？

微かな違和感を覚えて手を動かそうとした時だった。

動かない。

体が硬直してる。

何なのよ、これ…ッ。

「所詮は愚かな人間の戯言よね。残念だけど遊びはもうおしまい。

さあ私の可愛い娘たち、この愚か者たちを閉じ込めて押ししまい！」

「…はあ…い…」

彼女の背後から飛び出してきた二人は軽々と私とお父さんの体を抱え上げた。

「っ！！！」

声さえ出せずに抵抗もできない。

ドカドカと足音をさせながら連れて行かれたのは、敷地内にあった倉庫替わりの地下室。

そこへドサツと放り投げられる。

階段を転げ落ちたいせいで体中に痛みが走った。

ガタンッ

入口の格子戸が乱暴に締められる。

途端に動けるようになった体で入口まで駆け寄れば、あの人がこちらを見下ろしていた。

絶対零度の微笑みで。

「最後に一つ教えてあげるわ。もうすぐ町の人たちが野獣狩りに出かけるの」

「えっ!？」

「当然でしょう? 野獣がいたらいつまでもみんな安心して眠れないもの。それにあなたに手を貸したりして、私を怒らせたんだもの。償ってもらわなきゃ。」

「ちよつと待つてよ!! 彼は何もしてない!! 野獣狩りなんて今すぐやめさせて!!」

「ふふふ、せいぜいそこで悔やむことね。飢え死ぬまでちよつどいい暇つぶしになるでしょう?」

そう言つて、ダンツと入口を蹴り飛ばした。

「ちよつ、待つて!! やめて!! やめてツ!!」

力任せにガンガン入口を叩きつけるけどビクともしない。

それでも必死に叩く私の手を、お父さんの大きな手が止めた。

「リリー! やめなさい!!」

「お父さん!？」

「血が出てる。骨を折る気か?」

「でもっ」

「分かっている。彼を助けたいんだらう?」

「うん。だつて約束したの、必ず戻るからつて。彼の魔法を解いて、元の姿に戻すからつて」

「そうか。なら急がなきゃな」

「…ふえ?」

不意に笑みを浮かべたお父さんに、思わず間抜けな声が出てしまった。

「どういうこと?」

首をかしげている間にお父さんは地下室の壁を手でなぞり始める。

「元々この部屋は緊急避難用につつておいたんだ。ユリアーナは心配症でね、何故かやたらと秘密の抜け道を作りたがつたんだよ」

「抜け道?」

「何しろ好奇心が旺盛で冒険記が大好きだったからね、ワクワクすることにとても喜ぶんだ。おかげで色々つたよ」

「そ、う」

なんというか、二人の様子がすぐさま思い浮かんでしまう。きつと無邪気なお母さんは、一生懸命喜ばせようと頑張るお父さんを見てさぞ嬉しかっただろう。

その様子を目の当たりにしていたら呆れてしまつかもしれないけど、本当に仲がよかつたんだね。

何だかちよつと嬉しくなる。

「ああ、ここだ」

お父さんは壁の一部分をぐつと押した。

するとガーツという重い音がして壁が動き、小さな階段が現れた。「行きなさい、リリー」。この先は家の裏手につながっている。今から急げば間に合うだろう」

「うん！でもお父さんはどうするの？」

「まだ体が痺れているんだ。もうしばらくここで休んでから後を追うから。安心しなさい」

「分かった。先に行って、ラピスさん助けて待ってるから」

「ああ。気を付けて行くんだよ」

「はい！」

勢い良く頷いて私は走り出した。

続く

森がざわめいていた。

不穏な揺らめきを見せ、妙な轟音が響き渡る。

暗い部屋の中、あの薔薇を見つめていた私の耳に微かな足音が聞こえた。

随分慌てた様子で近付いてくる。

「ラピス様！！野獣狩りです！！」

滅多に取り乱すことのないヴィスコンティが息を切らして飛び込んできた。

その言葉に眉を顰める。

「野獣狩り、だと…？」

「はい！先導しているのはあの魔女でございます！！」

少し遅れてシシリエンヌまでもが駆け込んできた。

飛びぬけて優秀な執事長と侍女頭の二人を見れば尋常でないことが感じて取れる。

「まさかりリーに何かあったのか？」

「いえ、そこまでは分かりません。ですが」

「このままでは城内に乗り込まれるのも時間の問題です。すぐにも応戦用意を！」

「分かった。二人はみんなに指示を出してくれ。私もすぐに支度しよう。くれぐれも町の人々の命は奪うな。傷つけるくらいは仕方ないが」

「はい！！」

来た時と同じように二人は部屋を駆け出し、城中に怒涛のような支持が行き渡る。

一体なぜ突然野獣狩りが始まるのだ。

しかもあの魔女が乗り出すとは。

りリー、君は無事なのか…？

持たせた解毒剤は間違いなく効いたはずだ。

父親は必ず助けられるだろう。

だが、油断した。

あの魔女が二人を見逃すはずはない。

何か策を講じるべきだったのだ。

今更気付いても遅い。

ガンッ

不甲斐ない自分に腹を立ててテーブルを殴りつけても、獣の手に痛みはほとんど走らなかった。

こんなことをしても仕方ないことは分かっている。

とにかくあの魔女を迎え撃たなければ。

魔法の薔薇はまだ咲いている。

数枚の花びらを残して、かろうじて淡い光を放っている。

まだだ。

せめてこの花が散るまでは抗ってみよう。

リリーはきつと私との約束を信じている。

彼女を裏切ってはいけない。

守りきらなければ。

堅い決意を込めて、ぐつと拳を握り締める。

静かに閉じたまぶたに浮かんだのは、無邪気に笑うリリーの姿だった。

ドオンッ ドオンッ

地響きを伴う轟音が城中を包み込む。

しかし城内は張り詰めた空気の中に静寂が広がっていた。

一定の間隔で先の轟音が繰り返される。

そして、何度目かに扉の木々がちぎれ、木っ端微塵に吹き飛ばす派

手な音が合図になった。

階下では人々の怒声と悲鳴、激しくものがぶつかり合う音や金属の擦れる音が響く。

ドクン、と、鼓動がひととき大きく跳ねる。

ひたひたと忍び寄る気配と足音に剣を構えた。

一人、いや、二人か…。

そつと窓の外に身を隠し、侵入者たちの出方を伺った。

バタンツ

無遠慮に勢い良くドアは開け放たれ、二つの気配が部屋に飛び込んできた。

ちらりと窓越しに見れば、よく見知った姿ともう一つ、若い男の姿がある。

かつて私に呪いをかけた毒々しい華を纏った魔女と、間違った正義を煽られた男。

先に声を上げたのは男のほうだった。

「おい野獣！いるなら正々堂々勝負しろ！！リリーを攫った上にならぶらかしやがって！！」

誰が誰を攫って、たぶらかしたと…？

百歩譲って前者は仕方ないとしても、たぶらかすとは何と人聞きの悪い。

しかしあの魔女のことだ。

ある事ない事吹き込むのは得意だろう。

口八丁で彼らを丸め込んだに違いない。

「どこの野獣があの子に肩入れしたのかと思えば、ラピス王子だったのねえ。しかもまだ運良く薔薇も咲いている…まさかあの子に期待したのかしら？あの子に愛されて、魔法が解けるって？馬鹿ねえ。そんな都合のいい話があるわけないでしょう！？さっさと出てきたらどうなの！！ここでトドメをさしてあげる。早く楽になれるわよ？」

「…馬鹿はお前だ」

「あら、やっぱりここにいたのね。隠れてないで姿を見せたらどう？」

「ひとつだけ聞く。リリーは無事か？」

「今頃泣き叫んでるかもしれないわねえ」

「何？」

「ここのボウヤも知ってる通り、野獣に洗脳された可哀想なリリーは危険だから閉じ込めてきたわ。誰も助けにこないところに」

「何だと!？」

「だって当然でしょう？ 邪魔者は全て消さなきゃ」

邪魔者、だと…!？」

「…ふざけるなツ!!」

「あーらこわーい」

気色悪いほど甲高い猫なで声。

しかし一気に殺気が高まり辺りを鋭い空気で包み込む。

「ボウヤ、さつさと殺しておしまい! 愛しいリリーを奪われた恨みを晴らす絶好のチャンスよ!」

「分かっている!! さあ野獣、来いツ!! そっちから来ないならこっちから行くぞ!!」

言っが早いかヤツは駆け出し窓をぶち破ってバルコニーへ飛び出した。

隠れていた私をすぐさま見つけて剣を振り上げてくる。

キーンツ

剣同士がぶつかる金属音が夜空に響く。

「お前が、お前がリリーをツ!!」

「事情はよく知らぬツ、しかし、真実を自分の目で見極める!!」

「うるさいっ!! 醜い化け物の癖に、何が真実だ!!」

「あの魔女に騙されているのが分からないのかっ!？」

「嘘を言っな! 観念しろツ!!」

「ツ」

再び襲い来る剣をなぎ払う。

すると男は軽々と手すりを飛び越え、城の屋根に転がり落ちる。低いうめき声を上げて身を振りながら悶えるのを視界の端に留めると、今度は不意打ちとばかりにひゅつと矢が目の前に飛び交う。

矢尻が頬を掠めたせいで熱い血が滴り落ちた。

「あら、よけられたの？ふん、いつまでそう上手くいくかしら！？」
「何っ！？」

次々に鋭い鋒の矢が放たれ、それらを叩き落とすので精一杯になる。

バルコニーでは狭すぎて身動きが取れず屋根に降りて防戦一方に徹するが、魔女が攻撃の手を緩めるはずもなく、飛び込んでくる矢の数は目に見えて増えてさえた。

マズイ。

このままではいつまでたっても反撃できない。

絶対に不利だ。

何か、何か方法を考えなければ。

「ッ」

間一髪でよけ続けた矢が次第にあちこちを掠り始める。

次第に追い詰められ、足場も限られてくる。

「さあどうするの？王子様。そのまま谷ぞこへ落ちる？それとも私に殺される？どちらがお好みかしら」

ケタケタ笑い声を上げて魔女は言った。

このままではヤツの言う通りだ。

もう、後がない。

魔女との距離もどんどん縮まっっていく。

「ぐあっ」

よけきれなくなった矢が手足を貫く。

一貫の終わりだ、そう、覚悟した時だった。

「ラピスさん！！」

よく通るソプラノが耳に届いた瞬間、私の体は軽やかに魔女を飛

び越していた。

「リリー！！」

すぐさま駆け寄りバルコニーへ飛び上がると、小さく華奢な体をギョツと抱きしめる。

「無事だったのか…良かった」

「ラピスさん、ごめんなさい。遅くなっちゃって」

「いいんだ。こうしてまた会えた。嬉しいよ」

「私も！お城のみんなが町の人を追い払ってくれたの。残っているのはあの二人だけよ」

「そうか。少しの間ここで待っていてくれ。ケリをつけてくる」

「うん。気を付けてね」

もちろんだ。

私はしっかりと頷いてみせる。

そしてもう一度彼らに向き直った。

見えたのは、悔しげに唇を噛む魔女と、呆然と私たちを見つめる男の姿。

「リリーは戻ったぞ。さてどうする？私はお前たちの命まで奪うつもりはない。大人しく降伏するのなら命は助けてやるよ」

そう告げると、魔女の体は奇妙に震えだし、男は一瞬でギラリとした憎しみを瞳に浮かべた。

「本当に忌々しい…ッ！！どうしても私の邪魔をするって言うんだね！？」

魔女の激しい憎悪はリリーに向けられていた。

そして男の視線は私に突き刺さる。

「よくも、よくもリリーを…ッ！！」

男は素早く剣を構え、真っ直ぐ突進してくる。

同時に魔女は携えていた短剣を振りかざし、リリーに襲い掛かってくる。

しかし。

「危ない、ラピスさんッ！！」

「甘いッ!!!」

「うわぁっ」

彼の剣を払いのけ、柄で体を打ち据え鈍い音をさせながら屋根の上を転がす。

そしてリリーに飛びかかる魔女の体を鞘で払い飛ばした。

「ぎゃぁっ!あ、ああぁーっ」

踏み潰されたカエルのような声をあげたまま、魔女の体は谷底へ吸い込まれるように落ちていく。

男は悶絶しながら転げまわっていた。

当然だ。

止めの一撃は寸分違わず急所に叩き込んだのだから。

横目でその姿をみやって、ようやく私は剣を収めた。

そして再びリリーの隣へ戻る。

余程心配してくれたのだろう。

リリーは目を真っ赤にして涙を浮かべていた。

その上私の手足に刺し傷を見つけると、堪えきれなくなった涙をポロポロ零して、着ていた自分の服の端を破り、それを優しく当ててくれる。

彼女の優しさが嬉しくて、思い切り抱きしめたい衝動にかられた。腕をそっと伸ばす。

そして、ぐっと、抱きしめようとした。

けれど。

ドスッ

「!?!」

「ラピスさん…?」

「ツぐわぁっ」

突如襲われた痛みを衝撃が走り、出鱈目に腕を振り払ってしまっ。

「う、うわぁーっ!!!」

遠くで男の悲鳴が聞こえた。
異様に熱くなるわき腹に触れると、赤い血が流れ出していた。
体が崩れる。

「ラピスさん!!」

必死にリリーが支えてくれる。

それでも、私の体は重く床に倒れ込んだ。

「いや…いやよ、嘘でしょう…、いや、嘘、ラピスさん、ラピスさん!!お願い、目を開けて!ねえ!!」

「リリー…」

「そうよ、私。ここにいるわ!すぐ手当するから、お願い目を開けて!」

声だけが聞こえた。

頬に、胸に、温もりを感じる。

リリー?

冷たい雫は君の涙か…?

どうして、泣いている?

私は嬉しいんだ。

「最後に、君に、会えた…」

「え…?」

「私は…幸せだよ」

「ラピスさん…?」

「君と、過ごせた…君に会え、た…それ、で、じゅう、ぶ、んだ…」
「何、言ってるの?違うよ、最後なんかじゃない!まだまだよ、最後なんてまだ全然来ないんだからっ」

「い、いん、だ…ひと、こと…つたえ、た、かった」

「ダメ、ダメよ。お願い、目を開けて。私を見て」

必死に懇願するリリーの声に、最後の力を振り絞って目を開ける。

けれど彼女の顔をまともに見ることは叶わない。

無意識に浮かんだ涙が彼女をばやけさえていた。

そして目の端にあの薔薇が映り込む。

部屋には階下で戦いを終えたヴィスコンティやシシリエンヌたちが勢ぞろいしているらしい。

すすり泣く声が聞こえる。

ああ、本当に、残された時間はほんの少しだ。伝えなければ。

最後に。

この想いを…。

「リリー…愛、して、いる…よ…」
ありがとう、リリー…。

「いやっ！…！」

悲痛な叫びが、辺りを包み込んだ。

続く

Vol.12 物語の結末

目を閉じてぐったりと横たわる姿を、信じたくなかった。いつだって穏やかに見守ってくれた碧い瞳が、完全に閉じられている。

傷口を布で抑えても血は止まらず、必死になってスカートの裾全体を使って抑えたけれど、あっという間に赤く染まってしまっただけ。涙で視界がぼやける。

拭うこともできずに、ただ彼を抱きしめる。

お願い目を開けて。

まだ私、約束を守れてないの。

あなたを元に戻すって約束したでしょう？

それに返事をさせて。

愛していると言ってくれたあなたに、返事をさせてよ。

「お願い…死なないで…。一人にしないで」

私だって伝えたい。

「あなたを、愛してる…」

こぼれ落ちる涙と、最後の薔薇の花びらが、同時に舞う。

彼の胸にすがりつけば、もう何の音も聞こえなかった。

遅かった…。

こんな結末、どんなおとぎ話にもない。

呪いは解けるのよ。

そして王子様とお姫様はいつまでも幸せに暮らすの。

おとぎ話はいつだってハッピーエンドなのに、それなのに…こんなので、ない…。

「ラピスさん…」

そつと彼の頬に触れる。

柔らかい毛並みが心地よく手に馴染む。

二度と動くことのない唇に、口付けた。

途端、熱を失ったはずの彼の体温を感じる。

「え…？」

予想外のことに体を離すと、ふわり、彼の体が浮き上がる。
え？

急激に辺に光が満ち溢れ、目を覆うほど眩しく輝いたかと思うと、その光にラピスさんの体が飲み込まれていく。

どうということ？

神様が迎えに来たの？

突然の出来事に呆然としてしまう。

その間にも彼の体は眩い光の中でゆっくりと回転し、次第にその形を変えていた。

一体何が起こってるの？

光は次第に城全体を包み込む。

あつという間に薄暗かった城壁は白く輝き、おぞましい魔物の姿をした像たちは天使や女神の姿に変わる。

絡むように這っていた茨は美しい薔薇を咲かせた蔦になり、不気味な森は萌えるような緑を取り戻し静かに揺れた。

真っ暗だったはずの宵闇は消え、金色の朝日が私たちを照らす。
そして。

光の中から現れた「彼」は、目の前にゆっくりと降り立つ。

音もなく床に降ろされると「ん…」と小さく呻いた。

何が、どうなったの？

私はただ彼を見つめる。

すると黄金色の髪を揺らして彼は起き上がった。

「これは…まさか、戻ったのか…？」

手足をしげしげと見つめ、それから自分の頬や体を確かめるように触る。

それからそつと、こちらを向いた。

「リリー」

聞き慣れた声でした。

「リリー、私だよ。分かるかい？」

ひとときわ輝きを増した碧い瞳が私を見つめる。

柔らかで毛並みのいい黄金色の髪。

優しく緩む唇。

いつでも温かく包み込んでくれた、たくましい腕。

嘘…これは夢？

あの肖像画の王子様が、目の前にいる。

呆気にとられた私を戸惑いながら見つめて、躊躇いがちに腕を伸ばしている。

次の瞬間には彼の腕の中にいた。

そこから彼を見上げる。

夢じゃない。

これは、夢なんかじゃない。

「ラピスさん…ラピスさん！！」

「リリー！」

力いっぱい抱きついた私を、抱きしめ返してくれる。

ああ、戻ってきたんだ。

私、この腕の中に戻って来られたんだ。

心の中が幸福感で満ち溢れていく。

そう、これは現実。

「呪いが解けたのね？」

「ああ。君のおかげだよ」

「でもどうして？あなたの心臓、一度止まったわ」

その上深い傷がいくつもあつたのに、今はすっかり治ってる。

「あの呪いは、心から愛する人に愛されることで解けるんだ。だから言ったんだろう？君が鍵だ、って」

「そうだったの…。もっと早く伝えればよかった」

「いいんだ、こうして今があるんだから。見てごらん、君のおかげで城中が元に戻ってる。ヴィスコンティたちも」

「え？」

促された先を見ると、そこには光り輝くお城と、優しく私たちを見守っているフロックコートをびしつと着こなした若い執事さんと穏やかに微笑むメイドさんの姿、それにコックさんやエプロンをかけた掃除係さんにたくさんの執事さんやメイドさんがいた。

そして、彼らに勧められて姿を現したのは、車椅子姿のお父さんだった。

「よく頑張ったな、二人とも」

「お父さん！」

駆け寄って抱きつくと、骨ばった手が髪を撫でてくれる。

良かった、お父さんも無事だったんだ。

「あなたのおかげで助かりました。本当にありがとうございます」
ラピスさんは深々とお父さんに頭を下げる。

「いや、こちらこそ、娘を守ってくれてありがとうございます。こんなに幸せそうなりリーを見られる日がくるとは、心から感謝しているよ」

「どうかこれからはあたまこの城で暮らしてください。私たちと一緒に」

「ああ、ありがとう」

そうして二人は堅い握手を交わす。

「さてリリー、改めてやり直したいことがあるんだが、いいかな？」
ラピスさんは楽しげに言っ、私を立ち上がらせた。

やり直したいこと？

視線で問いかけて彼を見ると、にっこりとした笑みが返ってくる。
なんだろう、と思っっている間に左手をとられ、ラピスさんは跪いていた。

これは、知ってる。

おとぎ話の挿絵にあったもの。

ピンときた瞬間、私の目は熱くなった。

ダメよ、泣いちゃダメ。

せっかくの誓いが見えなくなっちゃうわ。

一生懸命堪えようとすると、涙は言うことを聞いてくれそうに

ない。

ラピスさんの碧い瞳がこっちを見上げた。

それは真実の愛を誓う合図。

「心から貴女を愛しています。どうか、私の妻になってください」

「…はい…!!」

手の甲への口付けはとても神聖で、次に降りてきた唇への口付けは、とても温かかった。

おとぎ話はこうして終りを迎える。

王子様とお姫様は、やっぱり幸せに暮らせるみたい。

そして二人の物語はまだまだ続く。

だってまだ始まったばかりだもの。

いつまでも、仲睦まじく、幸せに過ごさなくちゃね。

さあ、愛する王子様。

ハッピーエンドのその先へ、二人一緒に物語を紡ぎましょう？

ずっとずっと、遠い未来まで…

終わり？

VoI・12 物語の結末（後書き）

ようやく本編終わりました！ここまで読んでいただきありがとうございます。
ざいます。今後は番外編として、その後のお話や魔法が解ける前の
小話などを更新していく予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7174z/>

My Sweet Beast

2012年1月2日02時52分発行